GRL NEWS
Gender Research Library
Nagoya University

名古屋大学
ジェンダー・リサーチ・ライブラリ

No.9

2022年1月発行

「科学とジェンダー」シンポジウム・講演会

GRLではジェンダー研究の拠点として毎年企画に基づくシンポジウムを開催しています。

その最初が2019年9月に始まった「科学とジェンダー」シンポジウム・シリーズです。当時これを提案した私の動機を『GRL Studies』第2号の記事で「国際学会に出かけると日本以外は30-40%が女性研究者であるのに対し、日本は数%しか女性研究がいない（天文学系）ことから、日本の科学コミュニティは明らかに少ない数の研究者で競っていることを実感していたからである。女性が輝くことで大学も学会もそして国全体が輝くことを目指すべきだという強い思いに突き動かされ本シンポジウムを企画した」と述べています。

第一回、第二回のシンポジウムは「科学の世界における女性研究者のあゆみ」、「これから女性研究者が活躍するには」、「社会・大学と共に」の三部で構成しました。松尾清一総長、藤井良一元名大理事にもご講演いただき、科学分野を中心に女性研究者の過去と現在の置かれた状況、さらに今後について議論されました。こうした議論は男女を問わず、全学の各層の多くの皆さんに考えていただくべく、広報に努めましたが参加者の層は限られました。その原因の一つは、多くの研究者、大学関係者が女性研究者の参画の課題を自身の問題とまだ捉え切れておられず、また女性研究者の参加が学問を深め、大学も力を付けることに繋がることを必ずしも認識しておられないことではないかと感じました。

2020年度にはスタンフォード大学のロンダ・シービンガ先生の来日計画に合わせ、講演会を企画しようとしましたが感染症拡大のため1年延期となりました。しかし2021年になっても感染症は不透明な状況が続き、むしろ積極的にリモートによる講演会を開催することにし、2021年7月に「Gendered Innovations」と題して講演いただくことにしました。この題名はシービンガー先生が提唱されるキーワードであり、先生のHPウェッブ・サイトには様々な分野におけるジェンダー視点による研究・開発の進展がGendered Innovationsの例として示されています。この概念はジェンダーの視点を加えることでそれぞれの分野で科学が深まり、広がり、ひいてはイノベーションにつながることを教えてくれるものです。このことを多くの研究者、大学研究者が認識すれば、自ずと女性研究者を増やすことに積極的になるのではないかと考えました。しかし、このキーワードはジェンダー関連分野では理解され、第6期科学技術・イノベーション基本法にもこの言葉がそのまま書き込まれているものの、この時点では私を含めてまだまだ理解は深まっていないように感じました。

そこでシービンガー先生の講演会に先立ち、シービンガー先生の講演の導入部となる第三回「科学とジェンダー」シンポジウムを2021年6月25日に開きました。このシンポジウムでは医学、生命理学、環境工学の先生から、各分野におけるジェンダーの視点について多くの事例が示され、最後にパネルディスカッションでまとめていただきました。Webinarで70名ほどの参加があり、新たな事例を知ったこと、更に多くを知りたいというご意見が寄せられました。

2021年7月3日にはシービンガー先生とJSTの渡辺美代子先生に講演いただき、Webinarで200名を超える参加がありました。これらのシンポジウム、講演会の講師の皆さんに『GRL Studies』第4号（2022年3月末刊行予定）に原稿を書いていただいていますので詳細はそちらをご覧下さい。

今回のシンポジウムと講演会を通して、シービンガー先生がGendered Innovationsの目的は(1)科学技術研究に新しい価値を与えること、(2)科学研究がより社会の求めに応えること、(3)新しいアイディア、特許、技術の開発によって産業活動に寄与することであると述べられたのが強く印象に残りました。GRLとしては「科学とジェンダー」シンポジウムを継続し、より多くの研究者、大学関係者にジェンダー視点による研究や大学へのインパクトについての理解を広げることで、女性研究者の増加に繋げ,大学や社会が輝く背中を押したいと考えています。

（名古屋大学参与　國枝秀世）

トイレにナプキン★プロジェクト

（国際教育交流センター教授）
田中京子＊

職場のトイレに生理用ナプキンが置いてあるとよいと思いませんか？それもトイレットペーパーと同じように、無料でいつでも使えると、生理を経験する多くの人たちの勤務・生活の負荷が、かなり軽くなることでしょう。

名古屋大学職員組合女性部会は、大学がより働きやすい職場になるよう、女性ならではの課題を考えながら長年に渡って様々な活動をしてきました。例えば、以前は6週間までの産前休暇が2014年からは8週間まで取ることができるようになったり、定期健康診断の一環として子宮がん検診[1]が受けられるようになったりしたことにも、職員組合女性部会からの声が反映されています。

「男女共同参画」や「多様性」の時代といってもまだ、当事者から声を届けないとなかなか皆に共有されないことが多くあります。

そのひとつが、生理です。

女性の多くが、毎月1週間近く、約40年間にわたって生理を経験します。女性にとって生理は、特別なイベントではなく、ごく自然な日常だといえるでしょう。それなのにそこには、当事者だけが抱える、多額の出費、痛みや不快さ、時間や手間、不安など、多くの困難が伴います。

でもそのつらい状況は、十分に共有されていないようです。公共施設の女性用トイレにできる長蛇の列について、男性は知らなかったり、知っていても仕方ないと思っていたり、女性自身もあきらめているかもしれません。男性用トイレに駆け込まざるを得なかった女性が揶揄の対象になったり、避難所でのナプキン支給が1日1個！？という話もありました。生理用品が思うように買えない「生理の貧困」も課題になっています。しかし困っている当事者自身には声をあげにくい状況が連綿として続いています。

タブー視されがちだった生理について、もっと皆が知って助け合えないでしょうか。

この9月、職員組合女性部では、これまで先輩たちがバザーなどで少しずつ貯めた資金を活用して、名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ（GRL）と名古屋大学南部生協のトイレの一部に、ナプキンボックスを設置しました。それぞれの組織から補充などについて多大なご協力をいただいて、実現しています。広報やウェブアンケートにより、性別に関わらず、生理について一緒に考えていきます。わずかな資金が続く間のささやかな活動ですが、皆さんの意見を聞きながら、今後大学全体の取組に繋がるよう願います。

生理は様々な課題の一部であり、他にも、知らないところで悩んだり苦しんだりしている人々がいるかもしれません。声を出し合えて、互いに理解しようと歩み寄れるキャンパスの風土を作るために、仲間を増やし、輪を大きくしたいです。

1 2020年度からは乳がん検診に変更されました。

＊名古屋大学職員組合女性部会
トイレにナプキン★プロジェクト幹事

プロジェクト詳細・アンケート

GRL展示「小さな暮らしから考える家族生活とジェンダー：『暮しの手帖』をてがかりに」

（GRL研究員）
孫詩彧

2021年10月から、GRL1階閲覧室で、「小さな暮らしから考える家族生活とジェンダー：『暮しの手帖』をてがかりに」をテーマにした展示が始まりました。前年度に続き、GRLでは11月から来年1月までに、連続セミナー「家族とジェンダー」を3回開催する予定です。この連続セミナーとの関係から、GRLに所蔵する雑誌『暮しの手帖』を中心に、図書や論文などを参考資料にした展示を企画しました。

展示資料として主に使ったのは、1950年代から80年代のものです。この近代化と近代家族が成立する時期に、現在私たちが思う「伝統的な家族像」が作り出されたと言われています。「男は仕事、女は家庭」という性別分業において女性が抱える社会的不利や女性への抑圧もしばしば指摘されています。共働き夫婦が増えて事実婚や夫婦別姓、同性婚が論じられる現在は、以前に比べてジェンダー規範が変わり、男女平等が進んでいるのではないか、というイメージを持ちやすくなります。

こうしたイメージに対して今回の展示は、『暮しの手帖』をてがかりに、近代から現代の暮しにいったん立ち戻って、いくつかの問いを改めて考えてみることにしました。第一の問いは、雑誌にも性別はあるのか、日常の暮しは性別で分けられるものか、ということです。これに対して、『暮しの手帖』は否定的な答えを提示しています。当時雑誌の編集長であった花森安治は、読者の男女比が5対5になりつつあることを取り上げながら、編集側としても、暮しのことを女性の領分だと考えず、すべての老若男女がともに営んでいくものだと想定して編集作業をしていると説明しています。実際暮しの手帖研究室が行った台所改善シリーズなどの内容も、男女・公私の二元論を超える形で、暮しがよりしやすくなることを目的に議論を進めています。

第二の問いは、社会はかならずよりよい方向に向けて発展するのか、具体的には、時短家電の普及は暮しの負担を軽減したのか、ということです。暮しの手帖研究室は、様々な商品・家電テストを行い、メーカーに商品改善を促してきました。テストの指標を通して、当時の家事の量や質に対するスタンダードを覗くこともできます。ところが、展示資料・参考資料で紹介した国内外の研究が示したように、時短家電の導入により省力化ができるようになった一方、洗濯など家事の頻度が上がりました。その結果、主婦の労働時間は減りませんでした。その意味で、テクノロジーの発展が必ずしも社会をよりよく、より暮しやすくするとは限らない、という可能性が示されています。

それでは、日常生活を営むために何が大事でしょうか。第三の問いに対して『暮しの手帖』は答えの一つとして、「実用性」を提示してくれました。具体的には「便利さ」と「日常そのものに対する肯定」で説明することができます。商品・家電テストで重視されているように、家電や道具をどれだけ簡単で効果的に使うかが問われています。この「便利さ」を積極的に肯定して家事労働の軽減に寄与する編集部の意向に加え、日常生活の復権を唱えています。暮しのことを女性だけに背負わせず、家族全員が協力しあい、コミュニケーションをとりながら試行錯誤することが描かれています。

展示資料の詳細は、GRLのホームページでも紹介しています。お時間があるときにはぜひGRLにお立ち寄りいただき、遠くない過去と近い将来の暮しを、展示を眺めながら考えてみませんか。

政治との向き合い方

（法学研究科教授）
武田宏子

「最近、政治化しているのでは？」と、このところ言われることがある。確かに、もともとは「再生産」や「家族」など、フォーマルな「政治」領域の外に位置づけられ、したがって「政治学」の分析対象とはされてこなかった問題に取り組もうと試行錯誤してきたのに、この数年は政党や選挙、民主主義、男女共同参画の政治過程、女性議員増加のための施策といった政治学では主流として位置づけられるようなトピックを頻繁に取り扱っている。ひとつには、名古屋大学に着任して「政治過程論」というそれこそ「THE 政治学」と言える講座を担当することになったので、雇用者に対してそれなりに気をつかっているということはあるのだけれど、そうした便宜的な説明だけで済ませてしまってはいけない事情もあるので、この機会に書いてみたい。

まず日本政治全体の動向として、急激な高齢化に加え、少子化傾向に歯止めがかからない中、「再生産」や「家族」は、現在では重要性の高い政治課題としてフォーマルな政治過程にすっかり定着してしまっているように観察される。人口動態や経済構造の変化で「家族政策」に焦点が当たるようになっているのは日本に限られた現象ではないが、日本の場合、1990年代以降、継続的に政治的な対応がなされてきたにもかかわらず、出生数の停滞に代表されるようにその効果は限定的なものに留まっている。その結果、政府は出生率改善のための数値目標を取り入れるなど、よりあからさまな対策を取るようになってきており、この意味で、「再生産」や「家族」が政治的な問題であると主張することは、現状では、必要とされない。

他方で、2021年度補正予算に組み込まれると言われている子どもを対象とした直接給付に関わる親の年収制限をめぐっての議論が示唆するのは、「再生産」や「家族」が「どのように」政治問題であるのかという点においては、依然として検討されるべき課題が残されていることである。家族政策が設計されたり、実施される際に参照される家族モデルが「男性稼ぎ主型家族」であることから支援を必要とする人びとが政策執行の対象から漏れてしまったり、あるいはより大きな負担を強いられるということは、やっぱり随分と昔から指摘されてきた問題である。にもかかわらず、2021年の時点になっても、政府が無批判に「男性稼ぎ主型家族」モデルを用いたことは、政治過程における「男性稼ぎ主型家族」の問題化が不十分であり、したがって、政治過程に焦点をあてた分析を一層、徹底して行うことが求められていることを意味している。

その上で、自分が学生であった頃からほとんど変化していないように見える日本のジェンダー格差の現実へのいらだちから、「フォーマルな政治」にことさらに駆り立てられているところがあるのかもしれないとも考えている。「政治」がより良い社会を実現するための集合的な努力であるとしたら、日本のジェンダー格差の現状は、今まさに「政治」を必要としている。

不可視の境界線に向けられた近代日本の眼差し

（人文学研究科博士後期課程）
郭立欣

日本における近代ツーリズムの形成はとくに明治末期以降、国内の移動はもちろん、海外への渡航は鉄道、汽船、飛行機といった交通手段の発達をもって実現させてきました。こうした近代日本の異国体験のなか、今日に至っても特別な意味を持つ都市があります――かつて一時は10万人を超える日本人が在住し、虹口（ホンキュウ）＝日本人街と言われるほどのコミュニティを有する場所――上海。租界都市としては当時、「世界」というぼんやりとした存在への窓口として機能していたことは言うまでもなく、歓楽と犯罪、希望と堕落の明暗混在するところに多くの日本文人・作家は惹きつけられていました。

日本近現代文学の領域では1920年代から30年代にかけて、「魔都」という上海イメージを流行させた村松梢風の『魔都』や、横光利一の最初の長編小説『上海』はよく知られていますが、それ以降も絶えることなく、近年では『上海物語―あるいはゾルゲ少年探偵団―』（小中陽太郎著、未知谷、2016年）、『上海殺人人形』（獅子宮敏彦著、原書房、2017年）、『破壊の王』（上田早夕里著、双葉社、2017年）など上海を舞台にした作品群において、人種・民族、階級、ジェンダーの問題にまつわる国際都市の物語が次々と展開されています。こうした文学テーマであり続けている上海をめぐる近代日本の言説は、県城としての「江南の上海」という文脈からの逸脱として捉えることができると同時に、江南の位相という問題とも深く関わるものでもあります。

江南に内包されつつも江南ではないという上海への認識は、江南と上海との間に不可視の境界線が引かれることになりますが、この“無意識的な作業”は文学テクストのなかでも度々見られます。その一例を挙げてみれば、芥川龍之介は生涯唯一の異国体験であった中国の旅において、紀行文「上海游記」と「江南游記」をそれぞれ書き上げているところは示唆的であると言えるでしょう。私の研究はこの不可視の境界線に着目し、「上海」とは互いによって対象化されつつあり、また「上海」に取り残されたようにみえる「江南」はいかに描かれているか、そしていったい何を意味するかを考察しています。

近代日本の言説空間のなかで分断された上海と江南との関係意識は、その内部に行われる中心と周縁の逆転とは表裏一体のものとしてあらわれています。現在でも学校の教科書に登場する杜牧の『江南春（江南の春）』（原文：「千里鶯啼緑映紅／水村山郭酒旗風／南朝四百八十寺／多少楼台煙雨中」）は目に触れますが、上海の反面として「退廃的」「古典的」「女性的」といった言葉で語られてしまいがちな江南の一面にも気づかされます。そこにはオリエンタリズムやジェンダーの意味や言説が複雑に絡み合っていることを学際的視点からアプローチし、近代日本における江南の表象とその変遷を明らかにすることを目指していきたいと思っています。

お知らせ

「科学とジェンダー」第四回シンポジウム —科学におけるジェンダーの視点—

講師:
(1)田中実　理学研究科生命理学専攻
「ジェンダーのもとにあるもの—人と生物の性の表現型—」
(2)梶山広明　医学系研究科　(産婦人科)
「ジェンダーと医学—産婦人科医の視点から—」
(3)鳴瀧彩絵　工学研究科エネルギー理工学専攻
「ジェンダーの視点から考えるDX
(デジタルトランスフォーメーション)」
(4)新井美佐子　人文学研究科人文学専攻
「経済学におけるジェンダーの視点」

日時:2022年1月12日(水)13:00—15:30
場所:GRL2階レクチャールーム・オンライン(感染状況により
オンラインのみに変更する可能性があります)

〈シンポジウム概要〉
「科学とジェンダー」のシンポジウム・シリーズ第四回を左記のように開催します。ジェンダーの視点を入れると科学の世界がどう変わるか、第三回に続いて、それぞれの分野での事例紹介をしていただきます。今回は社会科学も取り上げます。こうした事例を知ることで、2021年7月に講演いただいたシービンガー先生のGendered Innovationsの目指すところを実感できると思います。GRL関係者だけでなく、学内外、多くの研究者、学生の皆さんの参加をお待ちしております。感染症の状況によりますが、できれば講師の皆さんと対面での開催(オンラインも同時開催)を予定しています。

GRL連続セミナー《家族とジェンダー》

第5回「夫婦別姓問題から家族・結婚を問い直す」

講　師:阪井裕一郎氏(福岡県立大学人間社会学部専任講師)
日　時:2022年1月28(金)17:00—19:00
場　所:オンライン・GRL2階レクチャールーム
(感染状況によりオンラインのみに変更する可能性があります)
参加費:無料でどなたでも参加していただけます。
(要申込、GRLホームページ参照)

プロフィール:
専門は社会学、特に家族社会学・歴史社会学・質的調査研究。これまでおこなってきた主な研究内容は、1)近代日本の家族・結婚に関する歴史社会学的研究、2)事実婚や同棲といったパートナー関係に関する質的調査研究である。最近は、家族をこえて実践される共同生活に関心を持っている。現在は、こうした新たな家族や共同生活について国内外でフィールド調査・インタビュー調査をおこなっている。著書に『事実婚と夫婦別姓の社会学』(白澤社、2021)、論文、「事実婚と『承認』——非法律婚カップルへのインタビュー調査から」『社会分析』(2020)など。

ご寄附のお願い

GRLは、ジェンダーに関する研究、教育、研究者の育成、ならびに男女平等意識の啓発、普及に向けて、フェミニズム、ジェンダー研究に関わる図書、雑誌、リーフレットやパンフレットなど、多様な文献、史・資料を蒐集・保存するとともに、研究者はじめ学生、市民など多くの方々に利用いただくことで、ジェンダー研究を実践的に発展させていくことをめざしています。

GRLのようなジェンダーをテーマとした研究活動施設は全国的にも珍しく、その個性的でユニークなありかたは、21世紀の知のパラダイム・チェンジに貢献しうる大きな可能性を有しています。GRLがジェンダー研究を深化させ、その成果を社会に還元できる知の拠点へと成長していくためには、文献、史資料を散逸させることなく、蒐集、保存、整理し、広く提供できるライブラリ、アーカイブの存在が不可欠です。

GRLが、先人たちの知の営みを次代に継承していけるよう、みなさまのご支援を賜りたく、お願い申し上げます。ご寄附金等をいただける場合には、こちらのメール(grl@adm.nagoya-u.ac.jp)までお知らせ下さい。

お問い合わせ: grl@adm.nagoya-u.ac.jp
電話: 052-789-5111(代表)
アクセス: 〒464-8601 名古屋市千種区不老町
地下鉄名城線「名古屋大学駅」1番出口より徒歩1分

GRL 名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ
Gender Research Library Nagoya University